

—お狐様の神隠し—

和上京鈴

「登場人物」

狐：山奥にある神社で祀られている狐の神様

ヒロイン（聴き手）：麓の村に住む少女

○神社（夜）

//ヒロインが境内をうろついている

SE：夜の山の環境音

SE：狐の足音

狐 「おい、お前。そこで何をしている？」

SE：ヒロイン、振り返る

狐 「……これは珍しい。

こんな山奥の神社に、人の子がやってくるとは」

ヒロイン「狐……？」

狐 「そうだ、狐だ。

この立派な耳と尻尾を見ればわかるだろう？」

ヒロイン「幻覚……」

狐 「幻覚などではない。

お前は村の者だな？

ならば『お狐様』という呼び名を聞いたことはあろう。

なに、30年ぶりの客人だ。そうかしこまらなくとも食べはせん」

狐

「私は古くから存在しているだけの狐よ。」

「お前たちの先祖が勝手に信仰して、やがて本物の神となった……
そんなところだ」

狐

「それで、夜更けに何の用だ？」

「山菜採り、というわけではなさそうだが……」

SE：狐、ヒロインに近づく

狐

「ああ、泣き腫らした跡が残っているな。」

「顔がボロボロだぞ？」

SE：ヒロイン、手で顔を隠す

狐

「隠すな。」

「人の子を見るのは久しぶりなのだ。よく見せておくれ」

SE：狐、ヒロインの手を下げさせる

狐

「……子うさぎのような赤い目は、お前によく似合う。」

「が、私を信じる人間の涙は、あまり面白いものではないな。」

「さあ、私に訳を話してみよ」

//ヒロイン、黙っている

狐

「……口を嚙んだままでは、私には何もできないのだがな。」

「どうやらお前の心の傷は、そう易々と共有できるものではないらしい。」

「まあよい。朝が来るまでのんびりしていけ。」

「茶も出せないような場所だがな」

ヒロイン『「お茶」を知ってるんですか？』

狐

「茶ぐらい知っている。村の祠に供えられたことがあるからな」

ヒロイン「お供え物って本当に召し上がってるんですね」

1 狐 「いや、飲んだことはない。直接口にはできないのだ。
2 超自然的な力でも働かない限り、
3 手を使わずに物を移動させることは不可能だろう？」

4
5 ヒロイン「神様の力とかで……」

6 狐 「神にそんな力はない。
7 他の奴は知らんが、少なくとも私には無理だ。
8 せいぜい雨を降らせるか、動物を戒めるか……
9 土地神にできることはその程度だ」

10
11
12 狐 「といっても時代の流れか、信仰する者も減ってな。私の力も弱まりつつある。
13 そのせいで最近、猪やカラスなんか田畑を荒らしているだろう」

14
15 ヒロイン「……」

16
17 狐 「どうにかしてくれ、とは言わないのだな。
18 自分たちが口にする作物に、影響が出ているというのに。
19 お前は……あの村が嫌いか？」

20
21 SE：ヒロイン、頷く

22
23 狐 「そうか。
24 ……だいたい何があったのかは、察しがついた」

25
26 狐 「家に帰りたくないだろうが、生憎ここは人の住める環境ではない。
27 本殿の中は埃まみれだしな。
28 ……そうだ、よいことを思いついたぞ」

29
30 狐 「お前、時々来て掃除をしてくれないか？
31 どこもかしこも汚れているせいで、15年ほど昼寝もできていないのだ」

32
33 ヒロイン「……ご自分でなさっては？」

34
35 狐 「薄情だな、自分でやれと？
36 私は神だぞ。なぜ祀られている側がそのようなことを」

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

ヒロイン「自分のことは自分でやるものです」

狐 「……ふ、はははっ。
なるほど、家の掃除を自分でするのは当たり前、と。
お前も私を敬っているわけではないのだな。寂しいものだ」

狐 「……だが、この場所を綺麗にしてくれれば、
お前が住むことを許してやってもよいぞ」

ヒロイン「えっ」

狐 「土を耕して作物を育てるも良し、動物たちに畑からとってきてもらうも良し。
……後者のは冗談だが、とにかく食べ物に関しては困らない。
水は近くの川から引っ張ってこれる上、
山の中ならば私の力を貸すこともできる」

狐 「どうだ？
いずれここで暮らすなら、お前が掃除してもおかしくはないだろう？」

//ヒロイン、迷っている

狐 「……まあ、急いで決める必要はない。ひとまず朝まで眠るがよい。
とはいえ、今はあの中に入るのは勧められん。
ひょつひょつ」

SE：狐が歩き出し、ヒロインもついていく

SE：本殿前の石階段に狐が座る

狐 「(腰を下ろす息遣い)」

狐 「ここなら悪くないだろう。
ほら、横になって私の膝を枕にするのだ」

ヒロイン「え」

1 狐 「どうした。人間は脆いから、柔らかいところでないと思えないのだろうか？」
2 ならばこうするのが良策と言えよう」

3
4 ヒロイン「でも……」

5
6 狐 「よいのか？ 迷っているうちに日が昇ってしまうぞ。
7 それとも……雄狐だからと警戒しているのか？」

8
9 ヒロイン「そういうわけでは！」

10
11 狐 「そうでないのなら、早く来い。
12 神の膝を借りるなど、なかなかできないことだぞ」

13
14 S E：ヒロイン、狐に近づいて横になる

15
16 狐 「そうだ、よい子だな。

17 ……落ち着かないか？ 体が強張っている。
18 だが問題ない。すぐに眠れる。
19 目を閉じて、私の手に集中しろ」

20
21 S E：狐、ヒロインの目元を手で隠す

22
23 狐 「目元に私の手のひらの温度を感じるか？

24 こうして両目を覆われれば、文字通り『何も』見えなくなる。
25 遮断されるのだ、完全に」

26
27 狐 「このまま、ゆっくり息を吸って……一度で吐き切る」

28
29 //ヒロイン、深呼吸

30
31 狐 「そうだ。もっと、もっと吐いて……2秒後、落ちる」

32
33
34 ○神社（昼）

35
36 //2週間後

1
2 SE…境内を箒で掃除しているヒロイン
3 SE…そこにやってくる狐

4
5 狐 「人の子、今日も精が出るな」

6
7 ヒロイン「おはようございます」

8
9 狐 「おはよう。」

10 ……お前が来るようになって、もう2週間か。

11 この辺りはさっぱりしたな。伸びきった雑草が物の見事になくなった。
12 中も空気の通りが良くなったからか、随分と快適になったぞ」

13
14 狐 「そろそろ休憩しないか。一緒に茶を飲もう」

15
16 ○神社・本殿(昼)

17
18 //向かい合ってお茶を飲んでいる二人

19
20 狐 「飲んで)……うん、お前が淹れる茶はやはり美味いな。

21 今日は茶請けは持ってきていないのか？」

22
23 ヒロイン「用意できなくて…すみません」

24
25 SE…湯呑を置く

26
27 狐 「いいや、構わない。

28 お前が前に持ってきた饅頭とやらは気に入ったが…

29 食べ過ぎては毒になってしまうからな」

30
31 ヒロイン「神様も病気になるんですか？」

32
33 狐 「神は病にかからない。毒というのは中毒のことだ。

34 欲深くなると、望んだものがいざ手に入らなくなったときに、

35 理性が崩れる恐れがある。

36 お前も気を付けるのだな。弱い者ほど、自分以外の何かに縋るものだ」

1
2
3 狐 「……だが、やはりもう一度口にしたいものだな。
4 いや、それは良くない。ああ、しかし……」

5 ヒロイン「では、ここで作ればいいのでは」

6
7 狐 「なるほど、ここで作るという手段もあるのか。」

8 それなら毎日でも食べられるが……外で火を起こせるとはいえ、少々面倒だな」

9
10 ヒロイン「私が作りますよ」

11
12 狐 「ほう……作ってくれるのか。」

13 ならばお前がここで暮らすようになったら、頼むとしよう」

14
15 狐 「だが、本当によいのか？」

16 提案したのは私だが、こんな質素な神社に身を置くとなると、
17 不便なことも多いはずだ」

18
19 ヒロイン「……今の場所よりは」

20
21 狐 「そうか……そうだったな。」

22 お前には逃げる場所が必要だ。

23 ……私と一緒にすることに、不安はないのか？」

24
25 ヒロイン「恩人ですから」

26
27 狐 「恩人、な。」

28 (呟く) お前は何かわかっていないのだな」

29
30 ヒロイン「何て言いました？」

31
32 狐 「いいや。せめて増築できれば、と。」

33 ただ、ずっと一人でいたせいか、

34 狭苦しい場所でお前と二人、身を寄せ合って生きていく……

35 それも悪くないと思っている」

36

1 狐 「……そういえば、お前がここに来ていることを知っている者はいるのか？」

2
3 ヒロイン 「……誰もいません」

4
5 狐 「ならばそのまま黙っておくことだ。

6 皆、私を恐れているからな。

7 通っていることを知られば、さらに立場が危うくなるかもしれん」

8
9 ヒロイン 「恐れているなんて聞いたことありませんけど……」

10
11 狐 「なに？ 最近の者は知らないのか？

12 ……これも時代の波か。

13 昔は『お狐様の神社に一人で向かうと、神隠しに遭う』

14 そう噂されていたのだ」

15
16 ヒロイン 「神隠し……」

17
18 狐 「案ずるな、不用意に山に入らぬよう子どもを躱けるための戒めだ。

19 人間は恐ろしい風説ほど信じてしまうものだからな。

20 その結果、触らぬ神に祟りなし……その言葉通り放置されたわけだが、
21 村を守る力まで弱くなってしまったのだから、本末転倒だ」

22
23 ヒロイン 「……」

24
25 狐 「どうした？ 私が怖くなったか？

26 まさか噂が本当だとでも？」

27
28 ヒロイン 「そういう風には見えないので信じられないな、と」

29
30 狐 「……はははっ！

31 つくづく信仰心のない奴だ。多少は怖がってもよいものを。

32 まあ実際、私は慈愛に満ちているからな。そのようには見えなだろうが……
33 私の機嫌を損ねて、村がどうなっても知らんぞ？

34 ……いや、お前にはどうでもよかったか」

35
36

1 狐 「それにしても、私は随分と甘く見られているようだな。
2 もはや神としての威厳など、無いに等しいのかもしれない」
3

4 ヒロイン「そんなことは」
5

6 狐 「気遣いは無用だ。
7 ……むしろ一方的に恐れられるより、このほうが息がしやすい」
8

9 狐 「30年も放っておかれて、さすがに一人に慣れたと思っていたが……
10 お前が来るようになってから、寂しがり屋の狐に戻ってしまったようだ。
11 お前には責任を取ってもらわなくてはな」
12

13 ヒロイン「わかりました」
14

15 狐 「そうあっさり……発言は取り消せないぞ。
16 よく覚えておくことだ」
17

18 狐 「(お茶を飲んで) ……ふっ。
19 穏やかな時間だ。どれくらいぶりだろうな、このような日々は」
20

21 狐 「先程教えた噂が立つ前は、村の人間が足を運んでいたこともあった。
22 しかしそのときはまだ、この姿にはなれなくてな。
23 こうして人と言葉を交わすことはかなわなかった。
24 それでも手を合わせ、話しかけてくる者がいて……
25 心があたたかくなったのを覚えている」
26

27 狐 「だから、お前には感謝しているのだ。
28 私に当時と同じ……それ以上の喜びを感じさせてくれて、ありがとう」
29

30 ヒロイン「……！」
31

32 狐 「なんだ、その顔は。私が礼を言うのはそんなに変か？
33 私は賢い狐の神だぞ。
34 あまり敬意を欠いたことを申すなら、いつそ噂をまことにしてしまおうか」
35

36 ヒロイン「えっ」

1
2
3 狐 「……ふつ、焦るな。からかっただけだ。
4 お前の様子を見れば、嬉しいと思ってることはわかる。
5 人間には尻尾がないから、他の生き物より感情がわかりにくい……
6 隣にいるうちに、お前の癖がわかってきた」

7
8 ヒロイン 「……どんな癖ですか？」

9 狐 「内緒だ。それを言ってしまうえば、意識してしまうだろう？
10 気になるだろうが、私の密かな楽しみになっておくれ」

11
12 //ヒロイン、黙る

13
14 狐 「安心しろ、そこまで顔に出てはいない。
15 ……私としては、もっと色んな表情を見てみたいものだな」

16
17
18 ○神社(夕)

19
20 //3週間後。神社を訪れるヒロイン

21
22 S E : 雨

23 S E : ヒロインの足音

24 S E : 本殿の扉が開く

25
26 狐 「……！ どうした、ずぶ濡れではないか」

27
28 ヒロイン 「……」

29
30 狐 「……とにかく、中に入れ。」

31 お前が持ってきていた毛布がある」

32
33 ○神社・本殿(夕)

34
35 S E : 雨

36

1 //服を脱いで毛布にくるまっているヒロイン

2
3 狐 「……もうそちらを向いても構わないか？」

4
5 ヒロイン「……はい」

6
7 S E：狐、振り向く

8
9 狐 「濡れた服はそこに干してある。

10 日が差すまでどれくらいかかるかはわからないが……

11 しばらくそれにくるまって、体を丸めている。

12 ……寒そうだな」

13
14 ヒロイン「大丈夫です」

15
16 狐 「嘘をつけ、体が震えている。……少し、そちらに寄りぞ」

17
18 S E：狐、ヒロインに近づいて座り、体を寄せる

19
20 狐 「隣にいれば、私の体温が伝わっていくはずだ。

21 ……直接肌に触れたほうが早いのだが、今はこれでよいだろう」

22
23 狐 「言っておくが、この雨は私の仕業ではない。

24 この地方一带に雨雲がかかっているようだ。止むまで待つしかないな」

25
26 //少しの沈黙

27
28 狐 「……なあ……村を、どうしてほしい？」

29
30 ヒロイン「え？」

31
32 狐 「川を氾濫させるか、毒を撒き散らすか、

33 獰猛な生き物に村人たちを食わせるか……私にできることなら何でもしよう」

34
35 ヒロイン「何を言って……」

36

1 狐

「お前には選ぶ権利がある。私が叶えてやると言っているのだ。自分を痛めつけた村に、未練などなかるう。私もとうに情などない」

2

3 ヒロイン「だからって、そんなこと駄目です」

4

5 狐

「……お前は善人だな。だが、愚かだ」

6

7 SE…ヒロインの頬に触れる狐

8

9 狐

10 「可哀想に。お前の目は最初から濁っていた。だから、私が隠してやろう。

11

12 人ではなくなるが、問題などあるまい」

13

14 狐

15 「傍に私がいる、それでよいではないか。永い永い時を共に過ごし、ひっそりと二人だけで生きるのだ」

16

17 ヒロイン「どうしてそこまで私を……」

18

19 狐

「お前に執着する理由か？」

20

「……あの日、ここに迷い込んだとき。

21

22 本当はすべてを投げ出たくて、山に入ったのだろうか？

23

24 あわよくば、命を断ってしまえたらと」

25

26 ヒロイン「……」

27

28 狐

「私が姿を現さなければ、お前がここまで傷つくことはなかったかもしれない」

29

30 ヒロイン「それは……違います」

31

32 狐

「本当に違うと言えるか？」

33

34 引き留めたのは私だ。よほど人の子が来たのが嬉しかったのだろうか。

35

36 ……欲張ってしまったのだ。だが悔いてはおらん。

37

38 むしろ、もっと早く私のものにすべきだった。

39

40 たとえお前が、それを拒んでも」

41

42 ヒロイン「……拒みませんよ。私も求めています」

43

1
2 狐 「……まことか？ お前も私を求めてくれるのか？」

3
4 SE:ヒロイン、頷く

5
6 狐 「はは、忠告したはずだぞ。
7 だが……お前に縫られるのは、気分がよい」

8
9 SE:狐、ヒロインを抱きしめる

10
11 狐 「(抱きしめる息遣い)」

12
13 狐 「どうやら、お前のことを完全に理解できてはいなかったようだ。
14 私もまだまだだな」

15
16 //ヒロイン、静かに泣く

17
18 狐 「どうした？ 泣いているのか？」

19
20 SE:狐、離れる

21
22 狐 「……複雑な表情だ。だが、ほっとしているのはわかる。
23 お前の笑った顔は、美しいな」

24
25 狐 「苦しみとの別れだ。先は長い。
26 まずはお前と、気の済むまで昼寝でもしよう。
27 お前が綺麗にしてくれた——この住処で」

28
29 SE:木々が騒めいてFO

30
31
32 FIN